

日本金融学会 2010 年度秋季大会（神戸大学）中央銀行パネル
テーマ「中央銀行の近未来像への理論的視座」

上智大学 竹田陽介
ニッセイ基礎研究所 矢嶋康次

趣旨

グローバル化の進んだ金融市場の変化に応じて、一国の中央銀行による金融政策が、目標として掲げる「物価の安定」を追求するだけでは不十分となり、手段としての金利操作のみでは無策となる現実を目の当たりにし、「中央銀行の近未来像とは何か」という問いが、セントラル・バンカー及び金融理論家だけでなく、一般的な関心としても耳目を引くテーマとなっている（例えば、朝日新聞『揺れる中央銀行（上・下）』2010年6月）。サブプライム・ローン危機に際して、金融政策を司る中央銀行にとって、「伝統」と「非伝統的」の境界線について、理論的に明確な一線を引くことは現在、困難なままである。

こうした中央銀行を取り巻く経済環境の激変に伴う金融政策の果たす役割の変化について、本パネルは、理論的視点から議論することを目的とする。具体的には、三つの大きな変化に焦点を当てる。ひとつは、資産価格の金融政策における役割、ふたつには、銀行のかかえる信用リスクに対する評価の役割、三つめには、金融政策と財政政策との相互関係についてである。それぞれのテーマについて専門に研究される研究者に、理論的な最新の研究を報告していただき、討論者及びフロアとともに討論する趣向を考えている。

理論的研究を議論の対象とすることにより、お題目に陥りがちな一般論を排して、理論的観点から「中央銀行の近未来像」について具体的に議論することがはじめて可能となる。理論的研究を柱としながら、中央銀行を取り巻く具体的な諸制度の改編を通じて、様々なリスクを事前的に防ぐ金融システムを構築していくために、多角的に議論したい。